

未来の巨匠にも

想いを伝えられる場所を



美術商 杉渕 薫さん

【プロフィール】
1954年秋田市生まれ。23歳の頃から、知人が経営していた画廊で経験を積む。83年に「杉画廊」(秋田市大町の茶町通り)を開設。その後、92年に現在の場所に「ギャラリー杉」をオープン。
ギャラリー杉 秋田市大町1丁目3-27
TEL.018-866-5422

秋田市通町で営業して27年目になる、画廊「ギャラリー杉」。こぢんまりとした空間に所狭しと並べられた芸術品が、愛好家たちの感性をくすぐり続けている。派手な宣伝をすることは無いが、それでも長年この場所に足しげく通うファンは絶えないのだという。そんな画廊の魅力が知りたくて、オーナーの杉渕薫さんの元を訪ねた。

この画廊のテーマは今。私たちと同じ時代を生きている作家たちの今の作品を感じてもらいたいと思っているからだ。「ジャンルは問いません。絵画や彫刻、ガラス作品…良いと思ったものは何でも展示しています。お声掛けする作家は、私が直感で『良いな』と感じた方ばかり。すでに世に名を馳せているような有名作家の作品はなく、多くの方に知られていない方がほとんどです」。

画廊には、貸画廊や常設画廊など数種類のタイプがあり、ギャラリー杉は「企画画廊」にあたる。杉渕さんが決めたテーマに沿って、作家たちが新作を披露する。「企画画廊の魅力は、常に作家たちの新作が見られるということ。また、同じテーマでも作家によつてさまざまな作品に仕上がるから面白いんです」。

杉渕さんが絵の道に進んだきっかけは、生粋の美術好きだったから。「小さい頃から絵を描くのが大好きだったんです。でも、



残念ながら上手ではなくて。すてきな絵を見てはうらやましく思っていました。自分では思うように描けないものだから、自然と見る方が得意になっていったのかもしれない。小学生の頃、お茶漬の素を買って世界の名画カードが付録に付いてきたのですが、それを眺めて幸せを感じていましたね。一番好きだったのは葛飾北斎、歌川広重でした」。

たくさんの絵に触れていくうち、腕は良いのに成功できない作家がいることを知った。「こんなにすてきな絵なのに、どうして認められないんだろうと、悔しく思いました。その思いが今の私の根底にあるのだと思います。作品に、名声や地位は関係ありません。たとえ無名な作家でも、良い作品であればたくさんの人の目に触れさせてあげたいんです。作家にとって、自分の作品から何かを感じてもらえることが最高の喜び。亡くなった後にいくら評価をされたとしても、本人に届きません。例えばゴッホは、在命の頃は無名でしたよね。もし、今の評価を知ることができたら…と思うと残念でならないんです」。

この画廊で作品を披露した後には、その実力が認められた作家も多くいる。「とにかく作品に何かびんときたら、その感覚を大切にしてみてください。いつかその作家が有名になったとき、若い時代を応援した自分がある。それは、まだ無名の頃にその魅力に気付いたあなた自身の価値でもあると思うのです」。

作品は作家にとって子どものようなものだと言います。杉渕さん。たくさんの人に愛されてこそ、喜びがあるのだという。「画廊は入場無料の美術館だと思って気軽に入ってみてください。まずは、本物に触れて見る、そこからスタートしてみてください」と、笑顔で話してくれた。